

■「形に残る仕事」

私がまだ小僧のころの話です。同郷の先輩が実家の都合で帰郷するため退職することになりました。

退職が近づいたある日、先輩からある頼みごとをされました。

岐阜に来て過ごした思い出を写真に取って帰りたいというのです。

「思い出の場所を一緒に回って写真に撮ってくれないか？」

とのことでした。もちろん、二つ返事でお受けしました。

そのとき私は勝手に「飛騨高山」や「白川郷」、「長良川」等々の岐阜の名所の写真をとるのだと思っていました。ところが、本人からのリクエストは入社してから退社するまでの間に、ご自分が関係した建設物を背景にした記念写真の撮影でした。

今とは違い、休日を取るのもままならない時代でしたが、なんとか同じ日に休みを取り撮影の旅に出ました。

岐阜県は縦にも横にも長いので、かなりの移動をしながら写真を撮影しました。〇〇警察署、〇〇マンション、……。一緒に建設物を回って気づきました。

「私たちの仕事は、『形』に残るもの」
なのだ。

「こんな仕事は、他には無いぞ」
道端を車で走ったときに

「これ、お父さんが建てたんだぞ」

そんなことを言える仕事は他には見当たりません。

■「ナイスガイが国土を守る」

道路を掘削して下水道の管を埋める工事を行っていたときのこと

です。民家へ下水道の管を接続するとき、湧き水が発生しました。さらに困ったことに石に当たり、管を取り付けられなくなりました。作業をしているみんなで知恵を出し合いますが、うっかり手を出すと危険で、水浸しでたいへんな作業になるため、なかなか良い案がありません。

そんなとき、一人のいかにも厳つく、強面の職人さんがドロドロの水の中に入って行って、危険を顧みず横たわり、スコップを持って掘削を始めました。全身がドロドロになり、長靴もベタベタになっています。しかし、それでもうまくいきません。

すると次に違う職人さんが今度はツルハシを握り、またしてもドロドロになりながら掘り進めました。現場監督である私は、恥ずかしながら上からただただ眺めるだけでした。

1時間ほどして二人の努力の結果、管を据え付けることができたのです。二人とも上から下まで全身ドロドロ・ベタベタで疲れ果てていました。

「今日はもうやめ！！明日はこの現場には来ないからな」

二人はたんかをきいて帰っていききました。

私は、もしも二人の職人さんが現場に来なかったらどうしよう、と心配していましたが、次の日の朝礼時、元気な二人の姿がありました。

多くの職人さんの泥だらけになりながらの努力により、日本の社会資本が成り立っています。3K(きけん、きたない、きつい)と揶揄されますが、まさに危険なところ

に、汚くなりながら、疲れ果てて働く人がいるからこそ、上水道を使い、排水溝から下水道に水を流すことができるのです。実際は多くの「ナイスガイ」が国土を守っているのです。

■「父が作ったお風呂」

私の父は左官屋でした。子供のころは、父が職人であることを恥ずかしく思った時期もありました。ただ、なんとなくそう思っていました。近所に出かけても、市外に出かけても父は必ず

「このうちの壁はお父さんが塗ったんだ」

とか

「ここの玄関のタイルはお父さんが貼ったんだぞ」

と得意気に言っていました。その頃は「ふーん」とあまり気に留めていませんでした。

しかし自分が働くようになり気のついたことがありました。それは自分のしてきた仕事が形になって残るということです。そんな職種はほかにはあまりありません。何年、何十年たっても変わらず自分が手がけたものがそこにあるのです。うらやましい限りです。

そんな左官屋の父も、もういません。しかし実家に帰ると父が自分でデザインし貼ったタイル張りのお風呂が待っています。父の自信作のお風呂場はいない父を感じられる場所でもあります。

そんな場所があるということは、職人の家族の特権だと自負しています。